

第12章 IPR研究と私

山内 晴子

私がIPR（太平洋問題調査会）の存在を知ったのは2000年です。勤めていた玉川聖学院の院長のバーナード・バートン牧師の「ミレニアム記念に、生徒だけでなく、先生方も何かにチャレンジしてください」の一言で、大学院への昔の夢が蘇りました。ミレニアム記念に、母校である東洋英和女学院大学の夜間大学院を受験したのです。

増田弘教授のゼミで、関静雄編著『近代日本外交思想史入門』の17名の思想を分担報告することになりました。朝河貫一は誰も知らなかったために「じゃあ、私がやります」といったのが、朝河との運命的な出会いです。早稲田の先輩に、これほど立派な国際人がいたのかと驚き、同時に高校時代から抱いていた「なぜ日本は第2次世界大戦を戦わなければならなかったのか。2度とその道を辿らないためには、日本人はどうしたらよいのか」との疑問への回答を得た思いでした。

谷口誠客員教授（元国連大使・OECD元事務次長）から、「修論のテーマはどうするの」と聞かれたので、朝河を書こうかと考えていると申上げると、「それはいい。余り知られていない人だし、僕の早稲田大学の研究室の隣の山岡先生は朝河貫一研究会をやっているから、ぜひお入りなさい。喜ばれますよ」とおっしゃいました。母校である早稲田大学のアジア太平洋研究科に山岡道男教授をお訪ねして、朝河貫一研究会に入会しました。その時に山岡先生からいただいた朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界』（早稲田大学出版部、1993年）に掲載された山岡論文「朝河貫一と太平洋問題調査会について」（203-216頁）を読んで、私はIPRを初めて知ったのです。山岡先生は『エール大学所蔵朝河貫一文書』全46巻を管理されていますので、研究科の資料室に通って2002年に修論を完成させました。修論のテーマである『朝河貫一新論：プロテスタントの倫理と日本外交の理念』は、主査の神谷不二教授の命名で、「少しお金を出してでも、出版すべきです」とおっしゃって下さいました。幸いにも、100頁に圧縮した『朝河貫一新論：日本外交の理念』を、副査の増田教授が、2003年2月に東洋英和女学院大学現代史センターから出版して下さい、国会図書館に納められました。

山岡教授は修論完成を喜んでくださり、製本して片桐庸夫教授、故大城ジョージ教授、ラドケ（K. W. Radtke）教授にも配って下さいました。その時、山岡教授から博士課程に入って朝河研究を続けたいかとお誘いを受けたのです。先生のサヴァティカルを待って、2004年に受験して、山岡門下の初めての博士後期課程の学生になりました。直ぐに、先生からIPR解散時の事務局長ウィリアム・L・ホランド名誉教授の回想録 *Paul F. Hooper ed.*

Remembering the Institute of Pacific Relations: The Memoirs of William L. Holland (龍溪書舎, 1995年)を紹介され、翌2005年には読書会で山岡先生のご指導を受けることができたのは大変幸運でした。

もう1つ忘れられない出来事は、2005年3月に山岡先生企画の修士留学生6名との、IPR生誕の地・ハワイへの研究旅行です。28日(月)に、ハワイ大学でポール・F・フーパー(Paul F. Hooper)教授から、IPRの歴史のレクチャーを受けました。1925年に第1回IPR Conferenceがプナホ高校(Punahou School)で行われた理由は、ハワイのYMCA理事長フランク・C・アサートン(Frank C. Atherton)が卒業した伝統あるエリート校であり、施設もハワイで一番良かったからだとなりました。ハミルトン・ライブラリーには、ハワイでの第1回と第2回IPR Conferenceの写真や、書簡などのファイルの入ったBoxも4箱が、机に広げられており、ユニバーシティ・アーキヴィストのジェームス・F・カートライト(James F. Cartwright)さんから説明を受けました。その後、校内の施設を見て回ったのです。翌29日(火)の午前中に、孫文が留学していたイオラニ高校(Iolani High School)に行き、孫文直筆の「天下為公」の額を見ました。お昼にはハワイ大学で、同大の学生と、前日に中国から帰国されたケイト先生(Dr. Kate)による現在の中国経済についての講義を受けました。午後には訪問したプナホ高校には、第1回IPR Conferenceが開催された建物がそのまま残っていて、感動でした。素晴らしく施設が整った、幼稚園から高校までの一貫校で、卒業生は本土の大学に進学してエリートになるとのことでした。2009年に初のハワイ出身の大統領になるバラク・オバマ(Barack Hussein Obama II)も、その1人という訳です。

博論主査の山岡先生、副査の後藤乾一先生・篠原初枝先生・故大城ジョージ先生・片桐庸夫先生のご指導を賜り、2008年3月に『朝河貫一論：その学問形成と実践』で博士号を頂くことができました。創立125周年記念に始まった早稲田大学学術叢書に応募して、2010年に早稲田大学出版部から出版して頂きました。

博士論文執筆過程で、朝河とIPRの関係に新たな発見がありました。その1つが、アメリカIPR会長・アメリカ東洋学会会長であるジェローム・D・グリーン(Jerome Davis Greene)の提案で始まったACLS(アメリカ学術団体評議会)日本研究委員会です。山岡道男先生は、「朝河が『調査会』活動に参加したという記録は見あたらない」(前掲書, 206頁)と書いておられます。ACLS Bulletinによって新たに明らかになった事実は、ACLS日本研究委員会がIPRと不可分であったことです。1930年12月6日に日本研究委員会の第1回会合が、アメリカIPRの年次総会出席者の昼食会と夕食会に付随して開催されたというのです。詳しくは、拙書『朝河貫一論』6章と9章や、拙論「朝河貫一：ACLS(アメリカ学術団体評議会)日本研究委員会と太平洋問題調査会」(山岡道男編著『太平洋問題調査会とその時代』春風社, 2010年)をご覧ください。山岡先生は、「ラチモアに対する評価からも明らかのように、朝河は、純粋な意味での学問・研究を価値基準として、学者としての人生を送っ

た」(前掲書, 212頁)と記しておられます。朝河は、その価値基準に則して、ACLS日本研究委員会の創立7メンバーの1人になったのでしょうか。委員長は、1941年11月に朝河に天皇への大統領親書草案を提案するラングドン・ウォーナーです。

また、朝河が東京専門学校当時から、グリーン一家と家族ぐるみの付き合いであったことを明らかにしたのは、『朝河貫一論』が初めてではないでしょうか。1893(明治26)年に朝河が、同志社を創立した組合教会派(アメリカでは会衆派)の本郷教会で受洗したことに注目すれば、理解できることです。ダートマス大学、イエール大学、ハーヴァード大学は、会衆派の大学です。IPRも、「YMCAが中心となり、太平洋沿岸地域と太平洋に利害関係を有する地域の民間人を中心とした国際会議(太平洋会議)」として始まりました。朝河の『国民新聞』への留学寄稿文にも出てくるYMCA米国同盟総主事ジョン・R・モット(John Raleigh Mott)と朝河の1915年の往復書簡が、福島県立図書館に残されていることも発掘できました。朝河は、モットに、後にIPRで活躍する姉崎正治・東京帝国大学教授を紹介します。姉崎は、当時ハーヴァード大学にいたのです。モットが、1946年にノーベル平和賞を受賞していることは、今では忘れられているのではないのでしょうか。

1944年11月28日にレン某氏宛(案)朝河書簡(『朝河貫一書簡集』660-663頁)のレン某は、中国太平洋問題調査会の初代の研究調査主任となる何廉(Franklin Lien Ho)です。この書簡から、そろそろ71歳になる1944年11月の時点でも、朝河が日本と中国研究の第一人者として、アドバイスを求められる地位にあることが分かります。

今回「朝河貫一と高木八尺」を執筆して、また新たな朝河とIPRとの関係を探ることが出来ました。山岡道男・増井由紀美・五十嵐卓・山内晴子・佐藤雄基『朝河貫一資料：早稲田大学・福島県立図書館・イエール大学図書館他所蔵』早稲田大学アジア研究センター、研究資料シリーズ5号、国際文献社、2015年2月)に、膨大な朝河関連書簡のリストを掲載しました。IPR研究者が、このリストをご覧になって、IPR関係者との繋がりを新たに発見されることを期待しております。

なお、私は、2011年『占領・戦後史研究会ニューズレター』27号に、「日本におけるIPR(太平洋問題調査会)研究の活動概観」を執筆し、1992年からのIPR研究会の歩みを把握することができました。